

専攻 (領域) 名	教職教育 (学校教育) 【教育心理学】	科目名	小論文	受験番号
-----------	---------------------	-----	-----	------

以下の資料を読んで、問いに答えなさい。解答用紙には問題番号を記すこと。

1. 心理主義とはどのような社会的傾向をさすのかを、本文中の言葉で説明しなさい。
2. 傍線①の理由を著者はどのように説明しているか。著者の考えを説明しなさい。
3. 心理主義の問題点について著者はどのように考えているかを説明しなさい。また心理主義のメリットとデメリットについて、自分の考えを述べなさい。

出典：<心>はからだの外にある「エコロジカルな私」の哲学 河野哲也
NHK ブックス 日本放送出版協会 2006

自己への問い
近年、「自己とは何か」を問う哲学的・心理学的な議論に、大きな関心が集まっている。自己をめぐるときさまざまな問題とは、たとえば、以下のような問いである。

- 「私とは何者か」
- 「自己の本質とは何か」
- 「性格や人格とは何か」
- 「本質の私とは自分の内面性のことだろうか、そもそも内面とは何か」
- 「個性的とはどういうことか」
- 「自分はかけがえない存在としてよいのだろうか」
- 「世界は私の主観的表象なのか」

これらの自己への問いは、学問的関心である以前に、真剣で切迫した人生の課題であろう。私はちば人生の節目において、仕事や生活、人間関係、社会的地位の大きな変化に直面して、しばしば自分とは何かを問う。そうした問いは新しい生活に傾けてゆくにつれて問われなくなり、いつしか忘れ去られてしまふことも多い。

しかし、かつてのように、「自己への問い」などは若いときの通過儀礼のようなものだ」と済ましてしまふわけにはいかない。現代の社会生活では、自己を問わざるをえないような状況がくりかえし待ち構えているからである。たとえば、「自己決定」や「自己責任」は近年急速に普及した概念である。それによれば、私たちは、これまで以上に、さまざまな局面において自分に関わる事情を決定し、その責任を引き受けなければならぬという。そこでは、一定の判断を下し、その責任を担うところの原則を構えた「自己」が要請されているのである。

「自分探し」の弊害
しかしながら、もし私たちが、自分の行動に関わる問題が生じたときに、つねに自分の内面へと注意が向き、自分のアイデンティティを問い直し、自分の性格や意識や心的内容こそを改良しようとする傾向をもっているならば、それはかなり異常なことではないだろうか。私たちは、人間の行動の原因はその人の内面にあり、行動を変えるには、その人の心を変えなければならぬと考えてはいないだろうか。もしそうだとすれば、それは「心理主義」という異に落ちてしまっているのである。

社会学者の森真一によれば、心理主義とは、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向。社会現象を社会や環境からではなく個人々の性格や内面から理解しようとする傾向、および「共感」や「相手の「きもち」」あるいは「自己実現」を最重視する傾向のことである(森二〇〇〇:22)。

心理主義は、かならずしも心の科学(心理学や精神医学、認知科学など)が生み出したものとは言えないが、その知識や技法が多くの人に受け入れられることにより、生じてきた社会的傾向である。第一善でくわしく取りあげることになるが、本来は社会的・政治的であるはずの問題を、その人たちが個人の問題へとすり替えて、問題を「個人化」することは政治的なプロパガンダの典型的な手法である。

職場における精神疾患の原因が、不健全な組織風土や恒常的な勤務過剰から生じているにもかかわらず、それを特定の個人の特殊な病理として扱おうとすることなどは、その一例である。あるいは、理論心理学者のフリーツ・パニャードが「心理学への異議」で批判しているように、心理主義とは、内面化という手段によって暗黙のうちに人々を統治する方法である。パニャードによれば、春園的であれ、結果的であれ、心理学はこれに加担してきてしまったのである(パニャード二〇〇五:16)。

かりやすい例をあげてみよう。

たとえば、就職前にした学生に対して、学校はしばしば性格テストや自己分析を行わせ、結果から自分にあつた職業や職場を探すように勧める。自己の性格に見合った職業を選ぶことが良い職業だとされているからである。しかし、「自分の性格はコレだ」ということから、あるいは、自分はコレコレの能力に優れているということから、ただちに自分の職業を選ぶことができるのだろうか。「外向的」な性格をしている人間は、サービスマンの営業、販売部門に向いている。その部門を担当することを好むなどと言えるだろうか。「内向的」な性格をしているがゆえに人と関わるすべを学びたくて、営業や販売を避けたいかもしれない。内気だが誠実な性格が幸いして顧客から信用を得て、営業や販売が喜びとなってゆく人がいるかもしれないではないか。

あるいは、近年の日本では若年層にニート(無職・無就労状態)が増えているというが、その原因を個人々の怠惰ややる気のなさとといった心理的な傾向に求めるような説明方式は、典型的な心理主義である。ほとんどの若者は就職しないのではなく、できないのであり、その原因はおもに企業が中高年の雇用を維持して、新規採用を抑えていることにある。あるいは、やはり近年では社会の階層化が拡大しているというが、下層階級に位置する人々について、「コミュニケーション・スキルの未熟」や「対人関係における積極性が足りない」といった指摘をすることも心理主義的解釈である。多くの人のコミュニケーションがうまくなれば、下層階級がなくなるかどうか考えてみれば、この説明のおかしさが分かるであろう。失業者や下層階級という政治的課題が、怠惰と

かコミュニケーションという個人々の心理の問題へとすり替えられているのである。自分が置かれている環境を分析することなく、開眼に自己を「内省」させること。怪談を豊かにさせるのではなく、ともかく内面に注意を向けさせること。これらは心理主義的発想の現れに他ならない。この傾向にとらわれてしまつて、的外れな「自分探し」をしている若者も多いはずである。